中村七三郎は坂田藤十郎のやうな江戸に於ける和事師であつた。元祿十年の冬、京都に上りて興行したが、女形水木辰之助が江戸より歸洛して、坂田藤十郎が座元であつた都萬太夫座に於て其の得意なる『七化け』を演じた爲めに、七三郎の方は不入であつた。翌十一年正月も同じく不結果であつたが、二の替として山下半左衞門座にて『傾城淺間嶽』を演ずるに及んで、好評嘖々として百二十日間の大入を取つた。當時藤十郎は『傾城江戸櫻』を演じたが失敗し、翌元祿十二年の春、近松門左衞門の作にかゝる『傾城佛の原』を演じて非常の好評を博した。此の兩名優が相推稱したことは『賢外集』に詳かである。

中村七三郎は元祿年中、江戸にて諸人に譽められ、評判を取りたるやつし方の名人、元祿十年の霜月、京四條山下半左衞門座へ上京し、顏見世は坂田藤十郎方大に流行りて、七三郎甚不評判にてよからぬ沙汰のみ少からず、馬の跡足と云ふ落首迄人々諷ふほどの仕損ひ、一兩ほしく追々藤十郎方へ一座の役者共來り、少長さん〳〵の取沙汰あり。又江戸より登り、京にやつし事をせらるゝと云ふこと、大きなる了簡違ひ、そこが下手のしるしなんど少長を誹りける。藤十郎申けるは、成るほど下手なり、京の見物は大に下手なり、七三郎は先づ近來の上手、此人の上に立つもの當時一人もなし、少長上られし故、我等も精出しなば、今年中にはちと藝もあがるべし、顏見世は此方仕勝るゆへ、二の替りは大きなることはものなり、決して二の替には仕つけらるゝならんと、顏見世半ばに申居られしが、果して翌次正月二十二日より、二の替りに『傾城淺間山嶽』と云ふ狂言を出し、少長巴之丞の後、碁盤縞の羽織をしき、茶碗のわれにて獨り碁を打ち、太夫奧州との口說きの段、いやはや外に眞似の仕手なき仕內、京中の見物上を下へかへし、顏見世とは打つて替へ、その大當り、さても七三はきつい上手かなとの大評判、此狂言百二十日興行しけり。隣芝居の一座、さてこそ藤十郎の申されし如く、扨々上手の胸中は恐しきことと感じぬ。藤十郎、金子吉左衞門をひそかに招き、顏見世より申す如く、今年は少長といへる大敵あれば、一座の役者は勿論、先づ狂言に骨を折らねばならず、貴樣狂言を作らるゝ故、油斷もあるまじけれど、一座の者よりも隨分貴樣勢つよく、狂言工夫あらねば、芝居の爲にならず、顏見世を仕勝しもの故、作者の氣ゆるみ出づる物ゆへ、わけて申すと、くれ〳〵內意ありける。さて替りの度每、藤十郎七三郎が仕內を見物して、天晴の上手なりと云ふ、又七三郎は藤十郎が藝を見て、さて〳〵藤十郎といへる役者は聞き及びしよりも、いたつて上手なり、我等是れまでに藤十郎の仕內を見て工夫つけなば、藝をあげん物を、何をいふても今はかひなしと悔まれし。藤十郎は七三を見て、先づ舞臺の行儀甚だ正しく見え侍る、さぞかし不斷の身持よろしからんと、心底ゆかしく、それより近づきになり、互に心安く度々出合申されし。七三郎元祿十一年、同十二年二とし

山下座をつとめ、同年の暮江戸木挽町山村座へ下らるゝに相談きはまり、七三郎より藤十郎方へ置きみやげを贈りたり、藤十郎餞別に何ぞ送らんとかねて思へども、あの方より置土産を贈られたるに、はなむけを又送りなば餘りしつぺい返しにて面白からずと、何も沙汰なしに暇乞に行く。心よく見え別れぬ。其翌極月二十九日に七三郎江戸の宅の門口に歩行荷六人にして持こむ、少長此由を聞き、添狀を見れば坂田藤十郎よりとあり、其荷を見れば、わくに入りたる大壺を出す。少長肝をつぶし、何を送られたるぞ、藤十郎の送りものなれば、さぞや心をこめられたる物ならんと、書狀を急ぎ開き見れば、加茂川の水一壺進上仕候、大ぶくに御遣被下べくとの文體、少長殆んど我を折り、さても〳〵我れ在京の內出會ひ、大方心を知りたると思ひの外、此志の送り物にて心の底深き事はかりがたしと、家內は勿論人々に語り申されし。さしもの少長だに、送り物にて藤十郎の心底深き事はかりかねたり、其餘の人、藤十郎の事など一向論じがたし。」

「古より當り狂言多しと雖、山下半左衞門の『嫁鏡』は五度のくりかへし、坂田藤十郎の『夕霧』狂言は十八度の大當り、中村七三郎の『淺間嶽』は三都にて數多度の興行あり、これを歌舞伎三大部といへり」と當時の批評家に云はれてゐた。七三郎は寶永五年に歿した。享年四十四、或は四十七歳とも云ふ。

中村七三郎の和事師たりしに對して、荒事師に市川團十郎があつた。西の坂田藤十郎とともに東西劇壇の花形で、又代表者であつた。團十郎の父は甲州より出でて下總に住し、後に江戸に赴いて團十郎を生んだ。團十郎は十四歳にして劇壇の人となり、始めて荒事と稱する藝風を上演した。蓋し金平淨瑠璃より會得した一種の殺伐なる藝風で、艶めかしき狂言に對する反動として、血氣ばやりの氣風ある江戸人士には歡迎せられたのである。元祿七年一月より京都の村山平右衞座に於て上演して、都人士の目を驚かした。當時の俳人椎本才麿の門に入りて才牛の俳號を受けたが、俳優の俳號を有することは此に始まる。翌年春大坂に赴き、元祿十年二月江戸に歸り、この歳三月、成田の不動尊に扮した。曾て成田不動に祈りて子九藏をもうけたので、當時九藏が初舞臺であつたから『不動靈驗記』を上演したのであつた。これより成田屋を以て其の家號とした。十五年二月『星合十二段』に辨慶に扮して、關所にて山伏との問答を演じた。これが卽ち『勸進帳』の始めで、頗る好評を博した。寶永元年正月、市村座にて『移徙(ワタマシ)十二段』を上演したが、二月十三日、俳優生島半六の爲めに刺し殺された。享年四十五。其の子九藏は二代目團十郎となつた。また一代の名優であつた。初代團十郎は俳優にして又狂言作家であり、三升屋兵庫の名にて幾多の脚本を述作した。彼の藝は江戸にては喜ばれたが、上方にては餘り喜ばれなかつた。元祿十二年の『役者口三味線』に評して、

第一荒い事が得物なり、これ京に喰はぬ風なり。濡事が不得手さうなり。其の上、物いはるゝに息つぎ急はしく、じゆつなさうに見えて氣の毒、藝はこなれたる所多し。第一、實事、武道の詰合、愁嘆が得物なり。荒武者の祖師といへり。

と云つてゐる。『元祿太平記』に此等の諸優を評したる言葉は、又時代の人の好尚を窺ふべきものである。坂田藤十郎を評しては、

當時都にて坂田藤十郎を上々吉として、金子が筆にも卷頭に出せり。此男傾城買を得物にして外の所作おろかなり、都の評判よろしけれども、大坂に於ては思ひつき薄し。其身濡れたる仕出しなれば江戸衆の氣に入らず、町人になれば能く寫れども、武士の眞似をすれば似合はぬ處ありといへり。是れ生れつきに柔かな所がある故なり。惣じて坂田が藝の中に費する口上多くありて聞くに退屈するものもありとかや、そも都にて賞翫の役者なれば、先は此地の立物、傾城買の上々と定め置候。

といひ、藤十郎と山下半左衞門とを比較して、

諸人の目に甲乙なしと雖も、粹者の見物によれば、山下が方には取得多し。第一半左衞門が仕出し、のつしりとして勿體あり、口上さつぱりと實事よし。武道勿論よけれ共江戸風にあらず、太刀對惡く、濡事坂田に劣らず、大坂にても思ひつきある役者なれば、先は二ヶ所の上手と見え、坂田と合うて甲乙のなき役者と沙汰致し候。

と品定めしてゐる。水木辰之助を評しては、「女形の開山、面體の勝れぬ處は玉に疵なり、藝に於ては難なし」と云ひ、七三郎をほめそやして、「七三は誠に何がならぬと云ふ事なし、されば昔より江戸の役者都に登り、粹方の見物に出合ひ、跡のあとまでしのばれしは七三一人に止めたり、古今の稀者、自然と藝に妙を得たり」と稱美し、團十郎については、

實事荒事得物あれども、濡事やつし事うつらず、拍子よし、諸藝振田夫にして口上いやし、愁歎よし、ちと所作に重き所ありて物云ひ急しく、じゆつなさうに見ゆる、金平か五郎などに成つては又つゞくものなし。

と云つてゐるが、蓋し當を得た評であらう。

享保頃よりは瀨川菊之丞が女形として名があり、又中村富十郎(慶子)があつた。いづれも大坂役者にて、上方と江戸との間を往來して人氣を博してゐたが、其の後寶曆の頃には、王子路考と云はれた二世瀨川菊之丞があり、寛政時代には中村仲藏の如き、五世團十郎の如きがあり、文化・文政に入りては、七世團十郎があつた。七世團十郎は改名して海老藏と云ひ、白猿と號した。天保十二年十月、中村座より出火があつたので、十二月劇場の轉地を命ぜられて、淺草猿若町に中村・市村の兩座は移り、河原崎座もついで移轉を命ぜられた。

六　町人文藝

藤原時代に於ける物語本には、文學史上に價値の多い巨篇大作もあつたが、鎌倉に入りては多く史實を主とする軍記物となり、更に足利時代には『曾我物語』、『義經記』等の英雄物以外に、幼稚なる御伽草紙が現はれた。『秋の夜物語』、『鉢かつぎ』、『物ぐさ太郎』の類がそれである。御伽草紙は單に文學史上の連鎖、若しくは搖籃期の作品であるに過ぎなかつた。次いで江戸時代の初期には假名草紙なるものが多く作られた。假名草紙の名は甚だ漠たるものであつて、其の範圍も廣汎である。初期の文學としての假名草紙の作者としては如儡子があつて、其の著に『可笑記』、『百八町記』等があり、また鈴木正三に『二人比丘尼』があり、山岡元隣に『誰が身の上』、『小厄（コサカツギ）』があり、淺井了意に『伽婢子（オトギボウコ）』、『堪忍記』等があつた。然し町人全盛の時代となると、人情風俗を主とした純文學浮世草子が現はれて、民衆の要求に應じ、其の時代の好尚に適するものを作り、一面には時代相をも寫し出すこととなつた。江戸の文學はこゝに於て始めて其の光輝を放つたのである。

浮世草子は世態人情を畫くと云ふ意よりして此の名がある。恰も繪畫に時勢粧を寫したものに浮世繪があると同樣である。天才井原西鶴は一たび出でて浮世草子の開山となり、又浮世草子作家の第一人者となつた。彼には犀利の筆鋒と、鋭敏なる觀察力とがあつた。西鶴は大坂の人で、俳人西山宗因の門人であつた。宗因は梅翁と號し、豪快滑稽なる俳諧を創め、之を談林風と稱し、一時天下を風靡したのであつた。彼は其の門下の逸足で、阿蘭陀西鶴と稱されてゐた。貞享元年六月には、住吉の社頭で一日一夜二萬三千五百句を獨吟して、二萬堂又は二萬翁と號した。元祿六年八月十日、五十二歳を以て歿した。西鶴の浮世草子はいはゆる好色本と稱さるゝ好色の二字を冠したものの外に、町人物があり、武家物があり、流石に大坂生れだけあり、流石に町人全盛の時代に生れたこととて、町人の味方であり、町人榮華の讃美者であつた。「人の家にありたきは、梅櫻松杉、それよりは金銀米錢ぞかし、庭山にまさりて家藏のながめ」（『日本永代藏』）と金權を賞めてゐるが、又町人の豪奢を戒めて、「黃金の釜のほり出し今の世にはなかりき、富貴にして苦あり、貧賤にして樂あり、一切の人間應ぜぬ分限を願ひ、身を滅す古例其數を知らず」（『本朝二十不孝』）と說いてゐる。彼は町人道の先覺者で、又民衆に對する指導家であつた。彼を以て單に好色本の作家なりとするは誤つてゐる。其の著に、『好色一代男』、『好色二代男』、『好色五人女』、『好色一代女』、『男色大鑑』、『本朝二十不孝』、『日本永代藏』、『世間胸算用』、『織留』、『武道傳來記』、『武家義理物語』、『本朝櫻陰比事』、『置土產』、『俗つれ〴〵』、『萬の文反古』、『一目玉鉾』、『近代艶隱者』、『懷硯』等があつた。門人に北條團水があつて、其の作に『日本新永代藏』、『本朝智惠鑑』があつ

た。西澤興志は『野傾友三味線』、『茶傾ひじり顔』等を作り、都の錦は『大和莊子』、『御前御伽婢子』等を作り、錦文流は『風流今兼好』、『熊谷女編笠』等の著はした。其の他、月尋堂は『今様二十四孝』、『世間用心記』を著はし、林文會堂は『當世智惠鑑』、『近代御伽百物語』を作り、青木鷺水は『御伽百物語』、『近代因果物語』を述作した。

京都の書肆八文字屋は役者評判記の板元であつたが、八文字屋安藤自笑は江島屋其碩をして浮世草子を作らしめ、多く自笑の名を以て之を公にした。其の名作には『傾城色三味線』、『傾城曲三味線』、『傾城禁短氣』等があつた。其の後、其碩は自笑と分離して江島屋なる板元となつた。此等の書を八文字屋本と稱した。其の傑作は枕本と稱する横本にある。

江戸にては、其の當初の俗文學は非常に幼稚で、赤本と稱する繪を主とした五枚綴の冊子が行はれた。『舌きれ雀』、『桃太郎昔咄』、『日本馬ぞろへ』、『日本開山名人ぞろへ』の類である。赤本とは其の表紙の色が赤であつたから、さう呼んだので、其の後一變して黑本若しくは黑表紙となり、再變して青本卽ち黃表紙が生れた。尤も青本は黑本と並び行はれたもので、其の內容は一つで表紙だけが色の違つたものもあつた。然るに安永四年、戀川春町が『金々先生榮華夢』を出してより、黃表紙は從來のものと全然相違し、これよりして或は諷刺に、或は穿ちに、輕妙の文に滑稽を寓することとなつた。作者には春町の外に、朋誠堂喜三二・芝全交・唐來三和・竹杖爲輕（森羅亭萬象）・本太郎（大田南畝）・山東京傳・市場通笑・伊庭可笑・南陀伽紫蘭（窪俊滿）等があつた。寶曆・明和の頃より洒落本が起つた。多くは花柳界の通と穿ちとを主としたもので、作者は唐來三和・蓬萊山人歸橋・內田新好・振鷺亭・朱樂菅江・式亭三馬等であつたが、最も傑出したものは山東京傳であつた。京傳は、氏は岩瀨、名は醒、字は酉星、俗稱は傳藏、京橋銀座二丁目に住んだから、京橋の傳藏を略して京傳と號し、又愛宕山の東に當ると云ふので山東と號し、後に山東庵と稱した。煙草入・煙管・賣藥讀書丸等を販賣した。畫名は北尾政演と云つて、北尾重政の門人であつた。安永七年頃より戲作に筆を執り、天明の末より寬政の初めにかけて、多くの黃表紙を著はしたのみならず、天明五年より寬政の初めにかけては、洒落本の名作を出し、文壇に獨步する觀があつた。寬政三年、寬政改革の餘波として、京傳及版元蔦屋重三郎は罪科に行はれ、著作は絕板を命ぜられた。これより後、彼は讀本に筆を染め、幾多の時代物を公にしたが、洒落本に於ける『令子洞房』、『古契三娼』、『通言總籬』、『夜半の茶漬』、『吉原楊枝』、『洞房妓談繁千話』、『大磯風俗仕懸文庫』、『青樓畫の世界錦の裏』、『志維川夜舟』、『京傳予誌』、『手段詰物娼妓絹ぶるひ』の如き、又黃表紙に於ける『江戶生艶氣樺燒』、『孔子縞于時藍染』、『大極上請合賣心學早染草』、『呑込多靈寶記』の如き名作はなかつた。『忠臣水滸傳』、『櫻姫全傳曙草紙』、『小說浮牡丹全傳』、『本朝醉菩提』等は彼の讀本としての代表作である。又『近世奇跡考』、『骨董集』などの好個の考證物もある。文化十三年九月七日歿した、享年五十六。

讀本の作家として、江戸文學史上の巨匠は實に曲亭馬琴であつた。馬琴は、氏は瀧澤、名は解、字は瑣吉、通稱は清右衞門、江戸の人である。初めは黄表紙に筆を執つたが、滑稽洒脱は彼の得意とする所でなく、寛政七年、『高尾船字文』と云ふ中本形の讀本を作つたのを手始めとして、專ら讀本の著述に力を盡した。其の中でも『椿說弓張月』は前後六年間の述作にかゝる五篇二十九卷の長篇で、頗る好評を博した。文化十一年、彼が四十八歳の時に其の第一輯五卷を公にした『南總里見八犬傳』は、二十八年の久しきに渉り、天保十二年に大成したもので、總篇一百六册の未曾有の巨篇大作であつて、文藻豊富、波瀾重疊の妙を極めて、彼をして江戸文壇の第一人者たらしめたものである。嘉永元年十一月六日、享年八十二歳を以て歿した。

式亭三馬は黄表紙にも、洒落本にも相當によい作品を殘してゐるが、彼の得意とする所は、中本の『諢話浮世風呂』(オドケバナシ)、『柳髮新話』浮世床』の如き、滑稽にして善く世態を描き出したものにあつた。三馬は、氏は菊地、名は泰輔、通稱は太郎、文政五年閏正月六日、四十八歳にして歿した。洒落本の滑稽を主としたものは、轉じて中本形の滑稽本となつたが、其の代表作は三馬の『浮世風呂』、『浮世床』と、十返舍一九の『東海道中膝栗毛』とであつた。膝栗毛は、享和二年に其の初篇を公にしてより、世評が喧しく、東海道より引續いて各地の膝栗毛となり、遂に十二編の長きに及んで、初篇の賣出しより二十一年の久しきに渉つた。一九は、氏は重田、名は貞一、天保二年七月二十九日、享年六十七歳にて歿した。

一册五帳の赤本は二册三册の黑本・青本となり、遂には次第に册數を殖やして合卷物となつた。之を總稱して草双紙と云ふ。其の双紙の最も長いものは柳亭種彦の『偐紫田舍源氏』(ニセ)で、三十八篇に及んでゐる。『源氏物語』を通俗化したもので、歌川國貞の艶麗なる表紙とともに名高かつた。然し天保十三年の水野越前守の急激なる改革の餘波を受けて、種彦も亦其の咎を蒙り、『田舍源氏』は絶板を命ぜられ、種彦もまた痛心して、其の年七月十八日、六十歳にて歿した。

洒落本の人情を穿つた一面は發展して人情本となり、曲山人に『假名文章娘節用』があり、爲永春水に『春色梅暦』があつて、遂に明治初期の文學との連鎖をなした。

狩野永德の子に孝信があつて、孝信の三子は、長を守信、仲を尙信、季を安信といつた。守信は卽ち探幽で、一世の畫宗となつた。中橋狩野は安信が之をついで狩野の總本家であり、探幽の後を鍛冶橋狩野と云ひ、尙信の後を木挽町狩野とし、此の家よりは常信が出た。常信の次子岑信(ミネノブ)の家を濱町狩野とし、以上四家を狩野の奥繪師とした。洞雲益信の後は駿河臺狩野と云はれて、四家と相桔抗した。此の他に表繪師と稱する狩野家は十六軒の多きに及び、又町狩野なるものもあつて、狩野派は門流が極めて盛にして畫壇を獨占するの觀があつた。然し師法傳承の外に出でずして、樣に依りて葫蘆を描くが爲めに門流は盛であつても、藝術界に寄與する所は少かつた。

本阿彌家は足利時代の刀劍奉行で、刀劍の鑑定、磨礪、淨拭を以て其の家業とした。本阿彌光二の子光悅は、其の家業の三事に精通してゐたばかりでなく、又書道を善くした。當時光悅と松花堂と近衞三藐院とを並べ稱して三筆と云つた。或時近衞三藐院、光悅に問うて云ふ、「今天下の書家は誰なるべきか」と。光悅答へて云ふ、「先づさて、次は君、次は松花堂と」。三藐院不思議がりて、「先づさてとは誰のことを指せるか」と問ふ。光悅云ふ、「恐れながら、私にて候」と。其の自ら標置することの高きを見るべきである。世に光悅風の書を稱して光悅流と云ふ。光悅は又畫を描いた。狩野派から出たのであるが、土佐派を研究し、別に獨創の畫境を開拓した。又蒔繪・彫刻・陶器をも善くした。元和元年、光悅が五十八歳の折、德川家康より洛西鷹ヶ峯の地を賜はりて、之に移り住んだ。又其の傍に一門の人々を始めとして諸工人を集め、此に一個の藝術町を建設したのである。しかも此の藝術町は法華宗の信仰を中心とし、常照寺・妙秀寺を建て、自ら住める所を大虛庵と稱し、法華信仰の傍ら靜に茶の湯を樂み、書畫を始め、藝術工藝の道に悠々自適した。世に光悅本又は角倉本若しくは嵯峨本と稱するものがある。光悅が其の表紙の模樣を描き、又版下をも書いたと云ひ傳へられたので光悅本と唱へ、光悅の書風を學んだ角倉素庵が開版したので角倉本と稱し、素庵が嵯峨に住んでゐたので嵯峨本と云ふのである。

光悅と並び稱せられた能書家松花堂昭乘は、山城男山八幡宮の社僧である。又畫をも善くした。輕妙にして氣品の高いのを以て知られてゐる。光悅は寛永十四年を以て逝き、松花堂は同十六年に歿した。

光悅より出て、更に之を開拓したものに俵屋宗達がある。宗達は、氏は野々村、一說には喜多川ともある。名は以悅、字を伊年と云つた。其の傳記は詳かでない。衰微した土佐派は此の偉大なる天才を得て、此に新生命を賦與せられ、藝術界に革新の氣運を起した。宗達の氣格は雄大で、極めて大膽な構圖と、沈厚なる筆法とを以て、總てのものを裝飾化せずんば已まなかつた。烏丸光廣讃のある所を見ると、蓋し寛永中の人であつたらう。宗達が出でて、後の光琳を起すことになつた。若し光琳以前に宗達が無かつたならば、光琳の領域も猶狹かつたらうと思はれる。傳はる所に依れば光悅の母妙秀尼の弟光刹の一女は宗達に嫁し、一女は光悅の妻となつたと云ふ。若し之を事實なりとすれば、光悅と宗達との間に親族關係があつたのであるが、此の說の眞僞は確かでない。然し此の兩者が密接の關係があつたことは、光悅が書をかき、宗達が模樣を畫いてゐるのでも分る。

尾形光琳の曾祖父道柏は光悅の姉の夫であり、道柏の子宗柏は光悅に從つて鷹ヶ峯に住んだほどであつて、光琳と光悅との間にも亦密接な關係があつた。光琳はもと九州の豪族緒方氏から出てゐる。宗柏の時に尾形に改め、東福門院の御吳服所の御用をつとめた。光琳は其の晩年に至り

て又小方氏と改めた。

光琳は狩野安信に師事したと云はれてゐる。之に就いても、異說もないではないが、普通には斯く唱へられてゐる。然し其の師事する所が誰であつたにせよ、光琳は之を以て足れりとしないで、古土佐の風を尊び、光悅・宗達に得る所が多かつた。殊に宗達に負ふ所は實に多大であつた。蓋し安土桃山以後、屏障に裝飾風の繪畫を描くことが流行し、永德・山樂・海北友松等は盛に其の椽大の筆を揮つて、いはゆる桃山百双屏風等を初め、幾多の大作をものして、裝飾美を屏障畫に現はした。俵屋宗達は不世出の天才を以て其の高潮を示し、裝飾畫は頓に大進歩をなしたが、ついで光琳が出づるに及んで、宗達を祖述して、遂に大成の名を擅にすることとなつた。後に文化文政の頃、酒井抱一が出て此の派を祖述した。

僧逸然は明末の亂を避けて我が國に渡來し、長崎の興福寺に居つて畫を善くしたが、其の門下に渡邊秀石・河村若芝等があつて、長崎畫派はこれより起つた。明の僧隱元は逸然よりの慫慂に從ひて歸化し、萬治元年に江戸に來りて將軍家綱に謁し、地を山城の宇治に賜はつて、黃檗山萬福寺を創建した。其の徒に木庵・卽非があり、木庵は黃檗の第二世となり、其の後を承くるものは、多く歸化の支那僧であつた。黃檗の僧侶は概ね書を善くし、其の書風を黃檗風と稱した。又此の寺には多く彼地の筆蹟遺品を收藏したので、文雅の士の來り見るものが多く、間接に藝術界に裨益する所が多かつた。

一たび逸然に依りて起りたる長崎畫は、更に其の後、伊孚九・沈南蘋の來歸するに及んで、伊孚九は南宗文人畫を起すに力があり、沈南蘋は寫生畫風を傳播するに功があつた。伊孚九の流は池大雅となり、與謝蕪村となつた。池大雅は京都の人で、名は無名（アリナ）、字は貸成、通稱は秋平、九霞山樵と號した。其の人となり飄逸恬淡にして、畫も亦之に適つてゐた。安永五年五十四歳にして歿した。蕪村は俳諧中興の宗で、天明俳壇の牛耳を執つた人である。本氏は谷口、名は寅、字は春星、夜半亭・三菓堂等の別號があつた。もとは攝津の人であつたが、丹後與謝郡にある母の生家に養はれたので、後に與謝氏と稱した。其の描く所は、瀟洒にして逸氣が橫溢してゐる。天明三年、六十八歳を以て歿した。文化・文政の交、谷文晁は江戸に出でて南北兩宗の畫派を合せて一時に鳴つた。文晁は、名は正安、通稱は文五郎、天保十一年に歿した。享年七十八。南畫を善くするものに、九州に田能村竹田があり、大坂に岡田半江があり、備前に浦上玉堂があつた。竹田は、豊後竹田の人で、名は孝憲、字は君彝、通稱は行藏、博學にして文事に長じ、畫も氣品が饒かであつた。賴山陽と交が深く、互に知己を以て許し合つてゐた。天保六年、五十九歳にて歿した。

關東には渡邊崋山があり、名は定靜、字は伯登、通稱は登、三河の藩士であつたが、夙に憂國の志を抱き、開國論者であつた。天保十二年、幕府の忌む所となり、累を主家に及ぼさんことを懼

れて自殺した、年四十九。其の門人に椿椿山があり、猶關東南畫家としては高久靄厓・立原杏所等があつた。寫生畫は圓山應擧に至りて大成した。應擧は丹波の人で、字は仲選、通稱は主水、明畫を研究し、自然を師として寫生の妙に入り、名聲一時を動かした。寛政七年、六十三歳を以て歿した。此の派を圓山派と云ふ。其の門人吳春は蕪村の門にも遊び、南畫と寫生畫とを併せて四條派を興した。其の弟に松村景文があつた。斯くの如く江戸の藝術界は、幕府御用繪師の狩野派が事實に於て振はなかつたのに反し、諸派が競ひ起つて千紫萬紅の美觀であつた。土佐派は光起を出し、住吉如慶・具慶を出したが、幕末に至りて、岡田爲恭（タメチカ）・田中訥言・浮田一蒐等のいはゆる古土佐復興派を出した。

足利時代の末から、風俗畫が起つて、安土桃山時代を經て江戸の初期に及び、土佐派の人も狩野派の人も之に筆を執つた。浮世繪はこれより胚胎したのである。普通に岩佐又兵衞勝以を以て浮世繪の祖とするが、必ずしもさうではない。又兵衞は越前から江戸に下つて、間々時世粧を畫いたので、江戸に發達して盛となつた浮世繪では、之を其の開祖の如く傳へたのであらう。又兵衞は慶安三年六月二十二日、江戸に歿した。其の子に勝重があつた。房州の人菱川師宣は風俗畫を描いたのみならず、支那版畫の影響を受けて、墨摺の版畫を多く作つた。師宣の子に師房、門人に古山師重・杉村正高・石川流宣などがあつて、其の派を菱川派と稱した。鳥居清信は芝居繪を描いた。其の後鳥居派は世々之を業とした。其の派に清倍・二代清倍・清滿などがあつたが、清滿は、美人畫にも筆を揮つてゐる。墨摺の版畫は筆彩色をする丹繪となり、更に漆繪となり、進んで紅摺繪となりて、二三の單純なる彩色を版に起すこととなつて、版畫は漸く進歩した。然し間々墨摺もないではないが、重に肉筆畫を描いた懷月堂の一派と、肉筆のみを描いた宮川長春などもあつた。上方には西川祐信が浮世繪畫家として其の名を殘したが、江戸には西村重長・石川豊信・奥村政信等があつて、多くの紅摺繪を描いた。鈴木春信が其の創首である。其の門人鈴木春重は、また錦繪が創められて、浮世繪版畫は大成した。明和の初めに至り、初めて幾多の色版を用ひ後の司馬江漢その人で、西洋銅版畫を學び、平賀源内等を師として、西洋風の畫法を取入れた。亞歐堂田善なども其の流を汲んだ者である。磯田湖龍齋・一筆齋文調も、亦春信の影響を受け、終には獨自の境を開いた。當時浮繪と云ふ遠近法を用ひた版畫も世に行はれた。北尾重政の門には北尾政美・北尾政演・窪俊滿があり、勝川春章は役者繪にも美人畫にも、將た肉筆にも長じてゐたが、其の門に勝川春英・勝川春好・勝川春潮等があつた。此の派を勝川派と稱する。歌川豊春は歌川派の祖で、後年歌川派は浮世畫界の重鎮となつた。天明・寛政の頃は錦繪の全盛時代で、其の最も傑れたものに、鳥居清長・喜多川歌麿・東洲齋寫樂があつた。細井榮之も此の頃に出で、其の門には榮昌があつた。歌川豊廣・歌川豊國は豊春の門から出たもので、豊國には門人が頗る多

く、殆んど浮世畫界を席捲する勢があつた。歌川國政・歌川國貞・歌川國芳などは其のうちにて傑れてゐた。歌川派に對して頡頏したものに葛飾北齋があつて、風景畫をも多く描いた。歌川豊廣の門から出た歌川廣重も、之と相並んでの風景畫の大家であつた。歌川國芳の門には大蘇芳年があつて、明治前半期の浮世繪畫家として名高かつた。其の門人に水野年方があつた。當時此の他に河鍋曉齋があり、小林永濯があり、西洋畫の手法を取入れて版畫を作つたものに小林清親があつた。

第六　民衆文化

一　東京奠都

明治元年七月十七日、明治天皇は勅を發して、「江戸は東國第一の大鎮、四方輻湊の地、宜しく親臨以て其政を視るべし、因て自今江戸を稱して東京とせん、是れ朕の海内一家、東西同視する所以なり」と宣はせられ、江戸に御親臨の叡慮を海内に示し給うた。其の副書に、「慶長年間、幕府を江戸に開きしより府下日に繁榮に趣き候は、全く天下之勢斯に歸し、貨財隨て聚り候事に候、然るに今度幕府を被廢候に付ては、府下億萬之人口、頓に活計に苦み候者も可有之哉と、不便に被思召候處、近來世界各國通信之時態に相成候ては、專ら全國の力を平均し、皇國御保護之目途不被爲立候ては、不相叶御事に付、屢東西御巡幸、萬民之疾苦をも被爲問度深き叡慮を以て、御詔文之旨被仰出候、孰れも篤と御趣意を奉戴し、徒に奢靡之風習に慣れ、再び前日之繁榮に立戻り候を希望し、一家一身之覺悟不致候ては、遂に活計を失ひ候事に付、向後銘々相當之職業を營み、諸品精巧、物産盛に成り行き、自然承久之繁榮を不失樣、格別之心懸可爲肝要事」と仰せ出されて、東京行幸の聖旨を明かにしてゐる。然し、未だ當時に於ては御遷都の叡志はおはしまさなかつたのである。佐藤信淵は其の『宇内混同秘策』に於て既に江戸奠都論を説いて、

「王都を建つべきの地は江戸に如くものあることなし、關東は土地廣平にして、沃野千里、且つ相模・武藏・安房・上總・下總の五州を以て內洋を包み、斗禰・秩部・鬼怒・多麻の四大河、內洋に注ぐを以て、水路能く通流し、百穀百菓、其他諸國の產物、運送甚便なり、萬貨豐饒人民飢餓の患あること鮮く、殊に峩々々たる崇山三方を圍繞し、以て他鎭と境界を分ち、只東方一面大洋に濱し、進では以て他國を制すべく、退ては以て自ら守るに餘りあり、郊野曠漠にして、馬强健に、民人は衆多にして勇壯、實に其形勢天下に雄たり、凡そ重に居て輕を馭し、强を以て弱を征する、永靜の基礎を立るに宜し、故に王都を建るの地は、江戸を以て天下第一とす、王都を此地に定て、永く移動すること無るべし」と云ひ、又東京と題して、「東京の畿內は、關東八州なり、西は越後・信濃に界するに、淺間・碓井・三國・保鷹等の諸山を以てし、東は大洋に濱し、北は陸奥の會津・白河・栃倉等の地に接し、南は足柄・箱根の險を以て關西と境域を分ち、後には二毛の富實あり、前には三總の豐饒なるあり、灣海を襟にして、銚江を帶とす、雄州雲の如くに連り、嚴城星の如く列し、甲信を控て、而して奧羽を引く、土壤膏腴にして、夥く五穀百菓其他の產物を出し、天氣晴朗にして、江山錦繡の如く、百川條流して、內海に注ぎ、地平に水穩にして、漕運極便なり、沃野廣曠、實に天府の國たるに論なし、殊に江戸は四通八達の街、萬物輻湊の衢、人民繁庶、都色壯麗、環らすに山水を以てし、左右映帶して陸商海客、風帆浪船、江濤煙雲の間に出入す、謂ふべし盛なりと、故に皇都は宜しく此地に建て、永く移動すること無かるべし」とまで極論してゐる。大久保一藏は大阪遷都を建議して容れられなかつたが、要するに大阪遷都は江戸遷都の前提に外ならなかつた。此の歲十月十三日、車駕東京に幸し、十二月二十二日、京都に還幸あり、翌二年三月二十七日、再び東京に行幸ありて、之より覇府の江戸は帝都の東京となつた。

諸侯伯旗下の士の邸宅は江戸時代に於て少からぬ地所を占有してゐた。江戸が東京になるとともに、此等の邸宅は漸次取拂はるゝこととなり、市街の上に新面目を將來した。外國との交涉頻繁となりて、世は文明開化を憧憬し、爭つて歐米の文化を輸入し、彼の風俗を模倣することとなつたのである。獨り結髮が斬髮となり、洋服姿がもてはやされ、士分が佩刀を禁ぜられ、駕籠が廢れて人力車・馬車が流行し、肉食が奬勵されたのみではない。明治四年には東京橫濱間に汽車の開通があり、郵便電信の制が設けられ、市街にも銀座に洋館の建築があつて、町並は一變し、事々物々に新奇を競ふやうになつた。覇府の江戸が帝都の東京に一轉したことは、事既に非常ではあつたが、外國文化の輸入がなかつたならば、大なる變化はなかつたであらう。又よしや外國文化の輸入があつたにしろ、江戸が帝都とならなかつたならば、亡びたる覇府の跡は一時蕭條として荒涼に歸したであらう。然るに既に帝都となりたる上に、世界の潮流は駸々として一瀉千里帝都に襲來したから、競つて舊を棄てて新に就き、帝都の面目は此に一新せざるを得なかつたのである。

明治初年に於て最も東京市街の美觀を呈したものは、銀座の煉瓦地であつた。明治七年梓行の『東京新繁昌記』には其の狀を敍して云ふ、「二層の高樓陸續巍然として蒼空に聳ゆ、其高大なるや專ら洋風の築造に模擬し、巨萬の煉石を積んで、高さ數十尺に及び、四壁に一本の柱を用ひず、亦一塊の土を塗らず、積んで漸く巨室を爲し、白墨を以て全面を塗る。板よりも坦かに、石よりも堅し。或は鐵柱を樹つる者あり、或は石柱を挾む者あり、佳麗盡さざるなく、結構至らざるなし。眞に城壁の如く、一車薪の火も燒く能はず、百轉雷も震ふ能はず、甍瓦鱗々、巨楹比々、一棟の長さ二十間、約ね七八肆店を開く。室內は戶主の造營に任せ、戶々各〻其店を異にす、蓋し官其賦金を收めて之を貸し、年月を積んで其全費を償ふに至れば則ち我が家なり、敢て等位を問はず、其財あるときは則ち此美屋に住すべきなり、亦大恩ならずや。街道の幅は廣さ七間、兩側に數種の樹木を栽ゑ、春は則ち肆店を芳雲の間に開いて、芳香馥郁、他の羅紗袖に薰し、商賣は花蕊と其繁華を競ふ。夏は則ち市場を緣陰の裡に張り、清涼滴瀝として客の蝙蝠傘を濕し、人煙枝葉と其稠密を鬪はす。徒行と車行と樹木を隔てて其通路を異にし、行人絡繹織るが如しと雖も、其雜沓に至らず、路上も亦遍く煉石を敷いて砥よりも平かに、席よりも清し、全街粲然として一點の塵なし、況んや犬屎をや。石室は則ち英京の倫敦に模し、街道は則ち佛京の巴梨に擬す、亦何ぞ萬里の波濤を踰えて其國都に到るを用ひん。他街も亦層樓大厦ありと雖も、或は蝸廬を挾み、或は蜂巢に隣し、概ね尾頭齊しからず、小町、笠根（かさね）と幷立し、白鷺黑烏と群飛するが如く、其全壁を見る能はず。八街（銀座四丁、尾張坊二丁、竹川坊一丁、金六坊一丁、合八街皆煉石室となる）は則ち一棟一樣、京橋より新橋に連り、眞に都中の都にして、繁華中の繁華と稱すべきなり」と。當時の煉瓦地に對する觀賞は斯くの如きものであつた。其の新橋停車場を記するや、「鐵道は卽ち新橋の南傍、汐留の右岸に在り、寬地瀟灑、廣さ數十步、木柵域をなし、自ら園囿を鐵道の間に開く。花卉數株、綠樹幾根、紅霞流るる處、人は鞍馬を繫ぎ、翠靄抹するほとり、客は出車を待つ。園の中央に石室あり、停車場と曰ふ、石を鏤めて柱となし、石を磨いて壁となし、精巧美麗、一大石を彫りて以て層樓となすに異らず。鐵道は基源を斯に發し、芝濱を過ぎ、高輪を經て、品川の背後に出で、御殿山を超え、六鄕川を渡りて川崎に及ぶ、此地にも亦停車場あり、橫濱の車と東京の車と相遇ふの地なり、鶴見を踰ゆれば則ち乍ち神奈川、是より頗る險路にかゝる、數十丈の山を鑿ち、一里程の海を埋め、直に左に折れて橫濱に達す、每驛に停車場を設けて客の昇降するに任せ、專ら便裡の便をなす。停車場は皆美を盡すと雖も、就中新橋を以て巨擘となす、樓上は則ち官局、樓下は則ち客室、室もまた二等あり、上等なるものは席に氈毹を敷き、簦子は美麗に、下等は則ち之に次ぐ、客は一標紙を買ひて證となす、川崎某月某日等の數字あり、その之く所に因りて其地名を記す。値に上中下の三等あり、下なるものは三十錢、中にして六十錢、上

は則ち一圓金なり。先づ値を納めて後車に昇る、車式の如きは則ち前輛を蒸氣輛となし、石炭水機器を備ふ、御者前面に座し、車尾に鈎ありて以て客車を牽く、一火輪車にして約ね七八車を連ぬ。客車も亦等位に因りて好惡あり、上等は亭榭の如く、毛席華麗、坐臥安適、窓榻玲瓏、炭煙到らず、車中の人は窓に憑りて品川の海色を左顧し、神奈川の山光を右瞻す、忽ち山忽ち水、山又山、水又水、奇觀變移、坐して横港九里程の遊歩をなす」と云へるもの、以て維新直後の歐米文化に眩目した狀を見るに足りる。

二　新しき日本

「智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし」と『五箇條の御誓文』に約し給うた如く、明治の初年は盛に歐米文化を輸入して、新時代に適應した新日本の新文化を樹立せんことに忙しかつた。

明治四年には廢藩置縣の詔を下し給ひ、封建制度を廢して郡縣の古制に復した。明治二年には東京・横濱間に電信を、同四年には東京・京都・大阪間に郵便を、同六年には東京・横濱間に鐵道を敷設したのを初めとして、次第に全國に及ぼし、三年には平民の姓名を許し、四年に散髪脱刀を許し、六年より太陽暦を用ひ、制度文物に一大變革を行つたが、歐米文物に心醉する餘り、極端な急激な破壞的態度も少くなかつた。

然し我が國民は徹底の極所まで行きつかないうちに自覺し、反省するを常とする。歐米心醉熱が盛になれば、其の反動として國粹保存論が擡頭して之を牽制する。一昂一低潮の徂徠するが如く、又歐米文化へのあこがれとなり、又祖國の傳統の美しさの顧望となる。けれども次第に舊文化は委棄せられて、新文化に謳歌する樣に成つて來たのは、一般の趨勢であり、傾向であつた。

征韓論の破裂より西南戰爭となりて、維新變動の餘波は鎮まつた。內地にありては民選議院建立の建白を手始めとして、政黨の組織となり、國會開設請願の聲となりて、明治二十二年二月十一日、紀元の佳節を卜して帝國憲法は發布せられ、翌二十三年、帝國議會は召集せられ、立憲政體はこゝに現出した。

明治維新以後朝鮮とは屢々交渉があつて、延いて支那との間に紛糾を生じ、其の結果は明治二十七八年の戰役となりて、我が國の大勝に歸した。その後、露國とも屢々樽俎の間に折衝が行はれたが、其の極國交の斷絶となり、明治三十七八年、國を擧げて露國と干戈の間に見え、遂に東歐の大强國に勝つて、蕞爾たる日本國は一躍して世界の强國となつた。蓋し明治天皇の御稜威と、國民精神の緊張との致す所である。

教育は普及し、文化は向上して、總ての民衆が、其の文化を了解するを得ることとなつた。江戸時代の如く、各階級にそれ〴〵其の階級の文化があるのと違つて、今日の文化は誰にでも共通

である。要するに教育の普及は總ての國民を自覺させたのであつた。斯くて文學にも藝術にも新しい運動が起り、新しいものが樹立せられたのである。

永らく東洋文化の上に築き上げられた我が舊文化と、西洋文化の礎の上に立つ新文化との間には相當に距離がある。そこにまだ充分の融和と結合とがない。それは今後の解決に待たなければならない。人は云ふ、我が日本人の使命は東西兩文化の調和にあると。蓋し然るものがあらうが、言ふは易くして、功を收むることは難い。例へば思想問題の如きものも、經濟問題の如きものも、我が日本に於てどう解決がつくべきであらうか。國體の尊嚴を保つて、日本人の天職を自覺し、我が國の文化をして世界に光被せしむべきは、今後の國民精神の緊張と努力奮勵とに期待すべきである。

昭和六年十月二十四日印刷
昭和六年十月二十八日發行

日本文化史
定價金壹圓五拾錢

著者　笹川種郎

發行者　東京市神田區駿河臺南甲賀町四番地　株式會社　雄風館書房　代表者　今泉訓夫

印刷者　東京市神田區三崎町三丁目八十九番地　鈴木赳武

印刷所　株式會社　明章印刷

不許複製
笹川

發行所　東京市神田區駿河臺南甲賀町四番地　株式會社　雄風館書房
電話神田(25)一四一一番
振替口座東京五五六八四番

GANSHODO
SHOTEN
KANDA TOKYO